

Title	青少年の学校制服に関する意識：大学生を対象とした質問紙調査をもとに
Sub Title	The consideration about consciousness to school uniform in youth people : based on questionnaire research for college student
Author	小澤, 昌之(Ozawa, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.69 (2010.) ,p.35- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000069-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

青少年の学校制服に関する意識

—大学生を対象とした質問紙調査をもとに—

The Consideration about Consciousness to School Uniform in Youth People Based on Questionnaire Research for College Student

小 澤 昌 之*

Masayuki Ozawa

Recently, school uniform (*seifuku*) is likely to be popular with young people because it is supposed to accept the fashion trend and student's idea in manufacturing process. This article considers about the significance of putting on school uniform, while tracing to the historical change in school uniform.

According to the analysis result of the survey data, the student who was designated in school uniform by the school regulation (so-called *seifuku shitei-ko*) had a positive tendency in the commitment to the school. And there was a gender difference about wearing school uniform (male student: study achievement, female student: the satisfaction to school). As for the factor to wearing school uniform, instance for general course and private school, the *seifuku shitei-ko*'s student had a tendency to positive effect for wearing school uniform. However, the higher student had come from social stratification (ex. the parents' education years etc.), the more passive there had tended to wear school uniform. Therefore, there might influence the positive effect with student's preference and acceptance of school side in wearing school uniform.

1. 問題の所在

2000年代以降、学校で着用する制服である「標準服」は多様化し、制服の着用やパーツの着こなしを自由化させた学校が増加する一方で、制服そっくりの私服を購入したり、他の学校の制服を入手して着用したりする「なんちゃって制服」が高校生の中で男女問わず流行している。現在では、制服のデザインやリニューアルの有無が、受験者数や偏差値を左右する事態となっている。しかし山田(2003)は現在では制服の身体管理機能を重視する「制服=管理」図式は崩壊を迎え、制服によって生徒を管理できなくなったと指摘する。その背景として山田は、第1に現代社会が経済的に豊かになった反面、匿名性が高く他者に無関心となったこと(逸脱的行動の許容)、第2に家族内の良好な関係や学校経営の維

* 社会学研究科社会学専攻 後期博士課程(教育社会学)

持のために管理を弾力化させた結果、学校や親の地位が低下したことを挙げている。

そこで学校制服の自由化が許容された文化的要因について検討すると、第1に逸脱文化の許容と生徒自身の反動形成プロセスの減退が考えられる。制服のブランド化が進む1980年代前半ごろまで、長いスカートや学生服などの制服の改造は、学校の押し付けるスタイルや「生徒らしさ」への反抗であると同時に、学校外におけるメディアや消費空間での流行とは乖離した「異装」であった（伊藤 2002: 91）。ところが1990年代になると、制服の着用を巡る意味づけは一変する。1980年代における学校経営の重要な課題は、逸脱や非行の解消であった。学校は80年代から90年代にかけて、管理的な教育の廃止や、生徒の個性や自主性を尊重する「居心地の良い学校」の構築を通して、非行問題を減少させた一方、学校の持つ社会化機能の低下をもたらした（大多和 2000）。第2の要因としては、少子化による学校経営側の戦略が挙げられる。1980年代中盤から一部の女子校は、第2次ベビーブーム期の子どもが中高生となる1990年代前半を見越して、婦人服メーカーと提携した大手制服メーカーは本格的に女子制服市場に参入し、従来のセーラー服からスーツやブレザーに切り替えるモデルチェンジ（以下MCと略す）などを通して、学校や保護者の声に配慮して制服＝学校イメージを定着させることに成功した。その後制服のMCは公立校にも広がったが、このころから制服は経済性・安全性といった従来の機能だけでなく、ファッション＝消費の対象として注目されるようになった（松田 2005b: 333-341）。つまり、1990年代の前後に制服人気が高まった背景には、大手制服市場による相次ぐ女子制服市場の参入と学校側によるMCにより、着用できる制服の選択肢が増え、男女ともおしゃれな制服を着ることが許容・重視されるようになった結果、制服が中学・高校生でいられる「期間限定感」（酒井 2002）を体現できるツールとして注目されたことが考えられる。

本稿では、学校制服のファッション化の過程やその役割変化をめぐる歴史的変遷をたどりながら、青少年の制服に対する意識や着用の実態を検討する。また本稿では、制服に対する意識と社会階層や学校生活など、制服着用の規定が想定される要因との関連性を分析し、制服着用の積極性／消極性を促進（ないし抑制）する文化的背景を考察する。

2. 学校制服の着用意識の変化を巡る文化的背景

2.1 学校における制服の役割（明治期～戦前まで）

本節では、学校制服における役割の変遷を考察する。制服における役割の変遷には、制服が持つ身体管理機能の有効性と、制服のファッション性が重視される過程とが相互に影響を及ぼすため、制服のMCが進展する1980年代までの両者の関連性を検討する。

日本で最初に学校制服が制定されたのは、1879年に学習院における男子の海軍士官型の洋装制服が起源とされる。その後1886年の帝国大学において自費支弁による制服が制定されてから、昭和初期までに小学校から大学に至るまで制服の着用が普及した（難波 2007）。だが中等教育段階の制服の製作者は、男子が通う中学校は当初から既製服メーカーであったのに対し、高等女学校は明治期から大正末は家庭裁縫教育の一環として着用者本人が製作する機会が多かった。その後大正末期に女子制服は、職業婦人の増加や、関東大震災時における世論からの和装制服の非活動性や装飾性に対する批判を契機に、1930年代までに洋服製作者による洋装制服が全国の女子師範学校・高等女学校に浸透した¹⁾。

学校制服の普及過程に違いが現れた背景には、政府は「文明開化」や権威の象徴として男子に洋装制服の着用を認めた一方、女子は一部を除いて「教場向不都合」という理由で和装（袴）を制服として制

定したことが挙げられる（佐藤 1975）。ただ片瀬（2003）は、明治30年代から女子の制服として、「御所風」に近く庶民風でない海老茶袴が普及した過程に関して、生徒本人がおしゃれや自由の象徴として進んで着用していたことを指摘した。したがって戦前期までの制服は国家統制によるジェンダー形成が行われた一方、女子生徒の制服は制約を受けながらも、現代の制服おしゃれ志向に通底するような、身体管理機能と「おしゃれ」を追求する差異化ツールという両義性が影響を及ぼしていたといえる。

2.2 制服のブランド化現象とその現状（戦後～現在）

本節では、戦後から現代に至る系譜をたどりながら、学校における制服の役割の変遷を考察する（表1）。戦後以降の制服は、公立校を中心に旧制中学校や高等女学校時代の制服を復活させた学校が多い一方、一部の私立校の中には生徒の希望で業者のデザインを行ったところがあったが、後に制服を校則の規定の下に学校と密接に関係づける流れが広まった（山口 2007）。ところが1970年代中盤に高校進学率が90%に到達すると、学校に在籍する期間が増加する「大衆教育社会」（荻谷 1995）が到来し、学校への適応類型として「向学校／反（脱）学校」という生徒文化の分化（耳塚 1980）が進んだ²⁾。偏差値で輪切りされた「学校格差体制」の中で、上位校や成績の良い生徒たちの中には向学校的で学校の期待に沿った文化が、下位校や成績の優れない生徒たちの中には、反学校的で遊びや逸脱を志向する文化が形成された（伊藤 2002）。その一方で、1970年代初頭に収束した学生運動が中学・高校に広がり、生徒指導や校則に基づく管理の対象となった制服の着用を拒否し、私服での通学を学校側に要求する制服自由化運動³⁾が起こった。長いスカートや学生服のように、反学校的なベクトルを志向した「ツッパリ」ファッションと制服自由化運動は、学校に対する姿勢や制服への親和性、当事者の制服観等の観点で異なるが、生徒文化の分化の中で伝統的な制服観に対する抵抗が関係づけられたと考えられる。

ただ、1980年代後半にある私立女子校が、DCブランド⁴⁾によるMCを行い、その学校の偏差値が急激に上昇してからは、制服の見た目や学校の威信や偏差値が左右される傾向が表れるようになった。制服のMCが急激に広まった背景には、既製服メーカーが少子化による私立校の受験者確保策として、1980年代に企業が導入したCI（Corporate Identity）にヒントを得て、学校側にSI（School Identity）の提唱を行ったことや、校内暴力対策として制服の変形を防止させることが考えられる（松田 2005a）。メーカーは、「学校がイメージや特色を受験生に鮮明に印象づけるための統一戦略」（仲川 1990: 27）であるSIを学校側に紹介し、知名度やレベルに関係なく、学校の個別事情に即したPR戦略を促進した。

学校制服の市場においてファッション性が取り入れられ、制服のブランド化が進んだ要因には、次の

表1 学校制服の変遷（戦後～現在）

年	～1970年代前半	70年代後半～80年代半ば	1988年以降	現在
社会	都市化-----産業化-----消費化-----情報化-----高度情報化			
学校	学校制度の整備	校内暴力対策	多様化	学校5日制
文化的側面	学校文化	反学校文化	若者文化化	若者文化
制服の作用	統一	個性（統一／抵抗）	差異化	多様化

（出典）山口（2007: 63）をもとに筆者が一部修正。

3点が考えられる。第1は、制服市場におけるマクロの変化である。1970年代ごろに、既に婦人既製服市場は飽和状態となっていたが、第2次ベビーブームに生まれた子どもが中高生となる1990年代前半を見据え、既製婦人服メーカーは全国に展開する大手男子詰襟服メーカーと提携し女子の制服市場に参入した。その後各メーカーはシェア争いを加速化させ、デザインやサービスをめぐる差別化を勢いづかせた(松田 2005a)。

第2の要因は女らしさへの対応(仲川1990; 2002)である。MCにより新しい制服を導入した学校に女子の制服が多いのは、社会における情報伝達速度が高まる中で、服装の流行が人間関係の親密度を決定するだけでなく、女性は男性と服装によって要求される情報が異なる(江原 1985)ことも関係している。また私服感覚の流行に沿ったものであれば、一部の制服に見られる丈長改造に走る要素が減少するだろうという学校側の期待が大きい。

第3の要因は、生徒文化を取り巻く状況の変化である。1990年代前後に学校や教育行政側が推進した個性化教育により、学校は生徒を管理する場から尊重する場となり、誰もがそれぞれ学校に適応し、「反学校」的行動は単なる嗜好の一つとして遍在化していった(大多和 2000: 207)。その中で学業成績や進路に反映された生徒文化の分化は曖昧なものとなり、進学校らしいスタイルや、目立った不良的スタイルは消え失せ、どんな学校でも同じような流行のスタイルが席卷するようになったことに象徴的に現れている(伊藤 2002)。

制服のブランド化は総じて、制服が他の消費財と同様に消費の対象となったことで、他者との差異化を重視する若者文化の側面(山口 2007)が反映されたことを意味する。同時に制服が、流行の中心的存在としての記号を身につけるアイテム(大多和 2008)となったことは、学校が生徒指導や校則を根柢に管理してきた制服の意義が自由化され、匿名的な都市空間に適応するための没個性の道具(中村 2004)へと変貌したと考えられる。

2.3 分析枠組

本節では前節までの学校制服をめぐる文化的背景を踏まえた上で、制服を着る意味の態様を検討するための視点を提示する。第1の課題は、現状における制服の着用実態の把握である。制服着用意識の研究に関しては、質的・量的調査を用いた研究が蓄積しており、制服の着用の仕方や外見により「向学校/反学校」のグループ分けを行うことを指摘した宮崎(1993)、学校制服の着用とギャル系雑誌の購読に相関関係があることを指摘した佐藤(2002)、制服に対し積極的な関心を抱く傾向は着崩しなどのファッション追求に必ずしもつながらず、制服以外の情報による影響を指摘した松田(2005a, 2005b)などがある。先行研究では個性化教育や制服のブランド化が進んだ1990年代前後を機に、制服の着こなしや流行へのキャッチアップ状況が、生徒集団における優越性を確保する差異化要素として機能することを明らかにした。ただ、授業に対する捉え方や生徒たちの学校生活感を反映させた分析に関しては、質的調査を中心に蓄積しているが、制服のファッション化が進展し、制服の着用の仕方や位置づけが多様化した2000年代以降の先行研究は少なく、学校生活での実態との関連性を分析することに価値があると考えられる。第1の課題では、制服着用と学校生活の意識項目をもとに、生徒文化の態様と制服着用との関連性について検討する。具体的には、学校制服の情報が、学校充実感や学習観、脱学校志向等の学校生活の関係項目に与える影響を分析する。

第2の課題は制服着用を規定する要因である。女子高校生への聞き取りと質問紙調査を行った上間

(2002)によれば、コギャル文化の獲得に内在する階層的差異⁵⁾は、生徒集団内部のポジション取りに影響を与える一方で、学校制服は階層に関係なく否定的な過去を帳消しにし、性的成熟をアピールするアイテムとして機能することに言及した。一方高校生を生徒集団の文化や教育達成に関連する先行研究によれば、逸脱文化形成のプロセスにおいて階層要因の影響力が弱まる一方、学習行動への階層要因が強まったことを指摘した大多和(2000)や、学歴社会イメージの進学への動機づけや学校タイプ-学業適応の対応関係が弱まり、大学進学への希望の有無が学校適応に影響することを示した研究(荒牧2001;阿部2008)などがある。高校生に対する質的・量的調査において、個性化教育による居心地の良い学校の構築が推進された1990年代以降、制服指定の有無に関係なく制服着用を肯定する知見が多い。一方で学校制服の着用がもたらす効果について実証的に分析した研究は乏しく、「校則・生徒管理指導の縮減・緩和→反学校・逸脱文化の限定的許容→学校適応→制服に対する肯定的評価の増加」(大多和2008;伊藤2002)という図式のように、教育政策の動向や生徒文化に関する先行研究の知見から学校制服の着用実態を記述する研究が多い。そこで第2の課題では、学校制服の着用を規定する要因に関して、先行研究で指摘された学校生活や社会化のエージェント(教師・家族・友人など)だけでなく、学校適応と関連する社会階層や進路選択過程などの進路形成要因も含めて検討を行い、制服着用と階層的差異の関係や進路選択に与える影響について詳細に分析する。

上述の課題に取り組むことは、近年では制服のMCに学校や保護者の教育方針が反映される(三田村2008)中で、制服の着用による連帯感や帰属意識などの機能が、高校生の学校生活の意識や学業・地位達成に及ぼす影響を測定するのに意義があると考えられる。

3. 調査概要とデータ

3.1 調査の概要

本稿で用いるデータは、慶應義塾大学YES研究会(研究代表者:慶應義塾大学文学部教授 渡辺秀樹)が、2008年10月～2009年1月にかけて実施した「第5回教育に関する社会意識調査」である。本調査は、首都圏内の10校(国立3校、私立7校)の大学生を対象に、授業時間の一部を利用して調査を実施したものである。本稿では大学生に質問紙調査を行った松田(2005)等の趣旨に沿い、高校卒業後間もない学生の高校時代における制服着用実態を分析する観点から、高校卒業後一定年数を経過した学生(25歳以上)を除いた1100名を対象として用いる。大学や偏差値等の構成は表1の通りである⁶⁾。

3.2 基本データの集計結果

本節では、高校時代の制服着用実態に関する結果について整理する。最初に学校での制服の指定については、制服のある学校出身者は86.1%(うち制服の指定があるが着用の義務がない出身者(制服選択校)は7.4%)、制服のない学校出身者は13.3%であった。

次に、性別と学校制服に関係する項目との間で χ^2 検定を行った結果(表2)によれば、2「制服ファッション通学」と4「制服おしゃれの気遣い」、5「制服=高校選択基準」に有意差があり、回答傾向に男女差が見られた。制服校出身者が回答できる1の高校時代に着ていた制服が好きかどうか尋ねた項目に関しては、男女ともに6割以上が肯定した。一方、制服選択校および自由服校出身者が回答できる2の制服らしい衣装で通学していたかどうか尋ねた項目に関しては、女子は過半数が肯定したものの男子は3割台に留まった。それでも、女子は制服校・自由服校とも制服着用を肯定する意見が見られたこと

表1 調査対象

	本部所在地	設置形態	偏差値	男子	女子
A大学	東京都	私立	47	24	91
B大学	東京都	私立	63	19	52
C大学	神奈川県	私立	50	73	35
D大学	東京都	私立	66	34	29
E大学	東京都	私立	45	37	24
F大学	東京都	私立	52	21	51
G大学	東京都	国立	60	159	111
H大学	東京都	私立	59	112	61
I大学	埼玉県	国立	56	30	36
J大学	東京都	国立	69	64	35

表2 制服の着用実態に関する項目

	男子		女子		回答 総数	検定
	肯定	否定	肯定	否定		
1 高校時代に着ていた制服は好きだった	69.7	30.3	63.6	36.4	864	+
2 制服のようなファッションで登校することが多かった	35.8	64.2	52.7	47.3	205	*
3 学校で制服を指定することは必要だと思う	65.0	35.0	65.3	34.7	1036	
4 制服をおしゃれに着こなすよう工夫していた	36.5	63.5	60.2	39.8	1030	***
5 受験した高校を選ぶ際に制服を考慮した	8.1	91.9	24.4	75.6	1035	***

(注) ①単位: 肯定・否定は男女別に%, 回答総数は名。肯定: 「どちらかといえばそう思う」と「そう思う」の合計。否定: 「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」の合計。②検定: *** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, + p<0.1。③制服がある学校出身者は1, 制服がないまたは制服の着用義務がない学校出身者は2を回答した。

は、単に学校に着ていく服は「制服でいい」という消極的な意見だけでなく、制服のブランド化や「なんちゃって」制服の流行を受け、制服を着ることの付加価値を積極的に肯定していると推測される。

次に共通回答項目を検討すると、3の学校での制服着用指定の是非は男女とも65%以上が肯定し、なおかつ項目間に有意差が見られなかったことは、男女に関係なく、制服の着用指定を容認する流れが現れたと考えられる。4の制服おしゃれの気遣いと5の制服=高校選択基準に関しては、男子よりも女子の方が肯定的な回答が多い上、4に関しては女子の回答が6割以上に達した。制服=高校選択基準に関

して男女とも過半数に達していない結果は、松田（2005a）が指摘するように、受験校の選択には、偏差値や成績などの情報が大きな影響を及ぼしている可能性が考えられる。ただ、4や5が男子より女子の方が肯定的な意見が多かったことは、前述の制服着用は是非と関連して、現代の女子高校生は、「かわいらしさ」を表示し、女のジェンダーを演出する記号として制服を消費し（片瀬 2003: 75）、他者を意識し自己表現やコミュニケーション手段として制服を着こなすと考えられる（羽賀・渋谷 2006: 99）。

制服の着用意識に関する項目に関しては、男女とも7割近くが高校での制服着用を肯定しており、制服を必要だと回答した一方、制服のブランド化やファッション志向による影響で、男子より女子の方が制服でのおしゃれを考慮することが判明した。本稿の結果を参照すれば、男子＝制服着用に関心はない、女子＝制服の着こなすに注目する、という二項図式が導き出されそうだが、逆説的に捉えれば、80年代以前の管理教育における厳格な服装指導とは一線を画し、男女の性別や地方・都市の違いに関係なくとも、制服の着用規定を自由化ないし弾力化した高校がかなりの割合で増加したことが推測される。

4. 分析結果

4.1 制服の着用実態と高校時代の生活意識

本節では、生徒文化の態様と制服着用との関連性について検討する。前節では、制服校・自由服校とも概ね制服着用に関して肯定的な回答が多かったが、具体的に学校生活の場面で、制服着用に対する考え方がもたらす影響に関して詳細に分析した研究は少ない。本節では、制服着用の意識項目のうち、「学校での制服指定」「制服おしゃれの気遣い」「制服＝高校選択基準」の共通回答項目と学校生活の意識項目との関連性に関してt検定を行う。

表3は前述の各項目について男女別にt検定を行ったもので、制服項目の肯定-否定の差異で各項目の平均値に大きな差はなかったが、制服関係項目の違いにより学校生活項目の回答傾向にばらつきが見られた。統計的に有意な項目のみ平均値に注目すると、「学校での制服指定」は、男女共通して有意であったものは怠学志向（B）と教師への敬意（G）で、男子の場合は成績期待（E）、授業知識の有用性（H）、回答重視（I）、女子の場合は授業充実感（A）に有意性が認められた。「制服おしゃれの気遣い」に関しては、女子のみ授業充実感（A）と教師への敬意（D）が有意であったものの、男子に有意差が見られなかった。また「制服＝高校選択基準」に関しては、どの項目にも有意差が見られなかった。

回答結果について集約すると、「学校での制服指定」については、男女とも制服を必要だと考える学校の生徒は、授業や学校をサボることに否定的で、教師を尊敬する傾向を示した。また制服指定を肯定する男子生徒は、周囲の期待を含めた学業達成に対して積極的となる一方、同様に制服指定を肯定する女子生徒は学校での充実感が高い傾向を示した。「制服おしゃれの気遣い」については、制服のおしゃれに否定的な女子生徒ほど、授業の充実や教師への敬意を肯定する傾向が見られた。一方男子生徒はおしゃれへの関心に有意差が見られず、おしゃれへの関心の有無は学校へのコミットメントに影響を与えなかった。「制服＝高校選択基準」については、受験校を選ぶ際に制服を重視するかどうかは、男女とも有意差が見られなかったため、先行研究である松田（2005a）の結果と一致した。

上記の結果を踏まえた上で学校生活と制服の着用意識との関連性について考察すると、次の3点に集約できる。第1に「学校での制服指定」の場合は、制服着用を必要とする生徒ほど学校へのコミットメントに積極的な傾向を示した一方、男子生徒の場合は学業達成、女子生徒の場合は学校充実感というよ

表3 制服の着用実態と学校生活の関連性 (t検定)

		3制服指定の 必要性		t値	4制服おしゃ れの気遣い		t値	5制服=高校 選択の基準		t値
		肯定	否定		肯定	否定		肯定	否定	
A 授業に充実感があった	男子	2.78	2.63	-1.629	2.69	2.75	.709	2.91	2.72	-1.450
	女子	3.07	2.88	-2.573*	2.93	3.11	2.645**	2.92	3.02	1.286
B 授業をさぼったり、学校を休みたくなることがあった	男子	2.13	2.37	2.366*	2.26	2.19	-.731	2.20	2.21	.035
	女子	2.08	2.35	2.614**	2.25	2.05	-1.963+	2.22	2.16	-.531
C 他の学校へ転校したいと思うことがあった	男子	1.43	1.54	1.245	1.48	1.47	-.042	1.57	1.46	-.721
	女子	1.40	1.54	1.632	1.45	1.44	-.181	1.53	1.42	-1.112
D 学校の中にいるよりも、学校の外での生活の方が楽しい	男子	1.97	1.86	-1.267	1.99	1.90	-1.142	1.89	1.93	.301
	女子	1.74	1.89	1.740+	1.82	1.75	-.841	1.81	1.79	-.173
E 成績や進路について、親や教師の期待を重く感じた	男子	2.07	1.85	-2.407*	1.99	1.99	-.103	2.20	1.97	-1.460
	女子	2.03	1.97	-.630	2.00	2.03	.326	2.07	1.99	-.741
F クラスの先生とは、普段気軽に話ができる関係だった	男子	3.12	3.12	-.098	3.13	3.10	-.291	3.27	3.10	-1.148
	女子	3.03	2.98	-.505	3.05	2.92	-1.403	3.06	2.98	-.700
G 一般的には、先生には敬意を払うべきだと考えていた	男子	3.36	3.07	-4.033***	3.18	3.29	1.529	3.05	3.27	1.706+
	女子	3.29	3.08	-2.970**	3.13	3.33	3.008**	3.25	3.20	-.678
H 授業で得た知識は将来役に立つと思っている	男子	2.86	2.66	-2.443*	2.81	2.77	-.494	2.70	2.80	.661
	女子	2.85	2.81	-.479	2.80	2.89	1.169	2.76	2.85	1.134
I テストでは途中の考え方より、答えが気になっていた	男子	2.74	2.49	-2.769**	2.73	2.61	-1.363	2.77	2.64	-.861
	女子	2.71	2.71	.028	2.75	2.66	-1.008	2.73	2.71	.190
J テストや成績が良ければ、友人から尊敬されると思っていた	男子	2.06	1.94	-1.423	2.12	1.97	-1.762+	2.25	2.00	-1.645
	女子	2.14	1.98	-1.842+	2.05	2.11	.713	2.13	2.06	-.738

(注) ①学校生活の項目に対して「そう思う」(4点)から「そう思わない」(1点)まで4件法で尋ねた得点の平均値。②検定: *** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, + p<0.1。

うに制服着用の必要性が影響を及ぼすベクトルに男女差が見られた。第2に「制服おしゃれの気遣い」は、女子のみ、おしゃれに否定的な生徒ほど学校へのコミットメントに肯定的な傾向が見られたことは、「校則違反をしながらも脱学校をせず、むしろ学校にコミットすることで、不安定さの解消を求め」(山口 2007: 68)る生徒という現状に反映されている。また女子生徒の他の項目と男子生徒のすべての項目に有意差がなかったことは、おしゃれへの追求や私服選びの煩わしさなどの理由に関係なく、制服の着用自体が学校での管理の象徴というよりも、付加価値や流行を重視した消費の対象として浸透していると教えられる(大多和 2008; 松田 2005a)。第3に制服で高校を選ぶ傾向は、高校進学後の生活意識にあまり影響を及ぼさないことである。但し逆説的に捉えれば、受験校の選択において制服のファッション性や着用の有無によりもたらす効果は限定的で、高校偏差値や内申点、校風など他の要因が影響を及ぼす可能性がある。

4.2 高校生の制服着用を規定する要因

本節では、学校での制服着用を規定する要因を分析するために、学校生活や社会化ネットワーク項目

だけでなく、学業や地位達成などの高校入学後の進路形成項目、親学歴や職業などの属性項目に注目する。規定要因を詳細に検討するため、学校での制服指定の有無を従属変数、進路形成項目と属性項目を独立変数としたロジスティック回帰分析を行う。

分析に用いる従属変数は、高校在学時に校則で制服の指定があった者と制服着用規定はあったが選択が出来た回答者を1、制服の着用規定はなかった回答者を0としたダミー変数を用いる。独立変数については、性別（男性=0、女性=1）、高校在学時の学校ランクの近似値として大学偏差値、地方／都市の近似値として現在の居住地（自宅外=0、自宅=1）を設定した上で、本人の出身階層に関する変数として親教育年数、親現職、家庭の生活水準を属性項目として投入した⁷⁾。高校進学後の所属の構成は、高校時代の成績と出席率⁸⁾、生活意識⁹⁾の項目については別に設定し、「非普通科（例：職業科高校、通信制など）」「公立校」「非大学進学校（例：高卒後ほとんどの生徒が就職する学校など）」「文化部・その他（高校時代の部活動）」を0、「普通科」「私立校」「大学進学校」「運動部」を1とするダミー変数を構成してモデルに投入した。モデルの構成に当たっては、分析枠組での知見を踏まえ、学校での制服指定を左右する媒介カテゴリーとして、性別と現在の所属大学¹⁰⁾、在学時の校則規定（自由／厳格）、出身高校（都市／地方）を設定した。

表4は性別と現在の所属大学でロジスティック回帰分析を行ったものである。分析結果によれば、男子の場合、私立校に通学しかつ成績の高い生徒ほど制服を着用する傾向にある一方で、父学歴に負の影響が見られた。女子の場合は、私立の普通校に通う生徒ほど制服を着用する傾向にあるものの、社会階層要因では、弱い有意ながら大学偏差値と父現職に負の影響が見られた。次に所属大学に注目すると、低位校の場合は、社会的地位の高い職業に就く母親ほど、子どもの制服指定に消極的となる。中位校の場合は、私立の普通校に通う生徒ほど制服を着用する傾向だが、通学区域の高校が制服の指定をするかどうかの影響を与える可能性がある。高位校の場合は、首都圏内に居住して私立高に通い、かつ成績も高い生徒ほど制服を積極的に着用する一方、社会的地位の高い職業に就く母親ほど、子どもの制服指定に消極的となる傾向を示した。実際には首都圏内の私立高ほど制服を指定する割合が高いことから、母親が受験校の制服の有無にセンシティブとなっている可能性がある。性別と所属大学では一部のカテゴリーを除いて、普通科・私立校ダミーが安定かつ一貫して正の影響を及ぼしており、出身高校における制服指定の効果が一定の影響を持つ一方、日常の生活意識に関する項目はほとんど影響を及ぼさなかった。

表5は出身高校の地域と高校在学時の校則対応でロジスティック回帰分析を行ったものである。地方出身者は、規範意識の高さや友人関係の積極性のような意識面、普通科でかつ私立高に通うという学校での通学規則の面の両方が、制服着用の積極性に関与する。一方で学力ランクや親の出身階層、家庭での仲の良さが制服着用の消極性に影響を及ぼしていた。首都圏出身者の場合は、普通科・私立校に通う生徒ほど制服着用に積極的な傾向を示したものの、社会階層や生活意識に関する項目による影響は見られなかった。次に制服厳格校は、弱い有意ながら負の影響を示した現在の居住地を除いて有意な影響が見られなかったのは、校則による制服指定が生徒本人だけでなく親にも支持されたことが背景として考えられる。校則自由校の場合は、普通科・私立校に通う生徒ほど制服を着用する傾向にある一方、母学歴が高いほど制服の着用に消極的となる。出身高校と学校校則の対応では、表4と同様に、一部を除き普通科・私立校ダミーは安定かつ一貫して正の影響を示したものの、母教育年数を除いて、社会階層要因が制服着用にあまり影響を及ぼさなかった。ただ地方出身者は規範意識や友人関係の積極性のよう

表4 本人の属性に注目した制服着用の規定要因 (ロジスティック回帰分析)

	性別		現在の所属大学		
	男子	女子	低位校	中位校	高位校
性別 (女性 = 1)			-.389	.768+	-.082
現在の居住地 (自宅 = 1)	.289	.351	.213	-.638	.963**
大学偏差値	-.025	-.042+			
父教育年数	-.262*	.061	.015	-.223+	-.058
母教育年数	-.162	-.106	-.072	.039	-.208*
父現職	.020	.313+	.145	-.095	.176
母現職	.166	-.198	-.701*	-.029	.147
家庭の生活水準	-.003	-.170	.077	.115	-.161
普通校ダミー	.779	1.518**	1.802*	1.740**	.528
私立校ダミー	1.773***	1.564***	1.009	1.962**	1.831***
大学進学校ダミー	-.566	-.532	.656	-1.040+	-.343
成績	.247*	.149	-.146	.269	.259*
授業出席率	.154	.343	1.034	-1.474	.358
運動部ダミー	.364	-.001	1.050	.678	-.032
規範意識尺度	.025	.028	.123	-.017	.022
家庭生活尺度	.027	-.072	-.134	-.061	-.005
友人関係積極志向	.114+	-.056	.065	.035	.017
学校生活尺度	.042	-.019	-.053	.061	.021
脱学校志向	.229	.042	.467	.038	.299
N	509	485	160	387	447
-2 log likelihood	339.744***	319.918***	80.725***	177.736***	366.605***
Nagelkerke R ²	.227	.174	.284	.220	.220

(注) ①数値は偏回帰係数 (B)。②検定は以下のとおり。*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, + p<0.1。

に、日常生活意識に関係する項目も制服着用に影響を及ぼした背景には、教師による服装指導や友人との親密さのように、社会化のエージェントによる影響が依然として根強い可能性が考えられる。

本節の分析結果を要約すれば次の通りである。第1は一部を除いて、高校進学後の所属である普通

表5 高校生活の実情に即した制服着用の規定要因（ロジスティック回帰分析）

	出身高校		学校校則	
	地方	都市	厳格校	自由校
性別（女性 = 1）	.115	.243	.068	.029
現在の居住地（自宅 = 1）			-2.077+	-.028
大学偏差値	-.064*	-.003	-.043	.010
父教育年数	-.022	-.140	.013	-.091
母教育年数	-.274**	.040	.014	-.161*
父現職	.226	-.008	.115	.163
母現職	-.059	.013	.076	-.052
家庭の生活水準	-.231+	.043	.115	-.104
普通校ダミー	1.166*	1.217*	1.375	1.147**
私立校ダミー	1.930***	1.565**	.166	.986**
大学進学校ダミー	-.443	-.628	-.485	-.366
成績	.064	.223	.454	.071
授業出席率	.539	-.180	-16.065	.165
運動部ダミー	.039	.461	.491	.149
規範意識尺度	.089*	-.023	.034	.014
家庭生活尺度	-.137*	.093	.094	-.037
友人関係積極志向	.154*	-.103	-.170	.005
学校生活尺度	.044	.016	-.128	.042
脱学校志向	.341+	-.014	.369	-.001
N	538	456	524	469
-2 log likelihood	335.275***	317.546***	85.837***	497.109***
Nagelkerke R ²	.278	.133	.212	.110

(注) ①数値は偏回帰係数 (B)。②検定は以下のとおり。*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, + p<0.1。

科・私立校ダミーは安定かつ一貫して正の影響を示したこと。第2に、親の学歴や職業などの階層要因は、制服着用に負の影響を及ぼす事例が多いこと。第3に地方出身者を除いて、日常の生活意識に関係する項目による影響が認められなかったことである。

最初に普通科・私立校ダミーが一貫して正の影響を示したことは、学校経営や校風に影響するため、生徒の制服着用を校則で管理する傾向が私立校に現れやすいという従来の知見と一致した。ただ地方／都市に関係なく正の影響を示したことは、制服着用を容認する意識が都市・地方に関係なく広がった可能性が考えられる。また一部の項目で、階層要因が制服着用に負の影響を与えた傾向については、1970年代における制服自由化運動を経験した親による影響や、私服通学を是認する傾向が強い地域固有の事情など複数の要因が考えられる。階層要因による影響が一部で見られたことは、制服選択や着用に親の意向が反映される証左と単純に受け止めるのではなく、高校の学力レベルや大学進学状況が主要な学校選択要因として働いた結果として、親の意向を経由して、在籍校での学校文化や教師の教育方針などの間接的な要因が影響を及ぼすと解釈すべきであろう。最後に日常生活意識に関しては、地方出身者の場合に社会化のエージェントによる影響が依然として根強い可能性を示した一方、他の媒介カテゴリーに対する影響は見られなかった。逆説的に捉えれば、日常生活意識に関係する項目による影響が他の媒介カテゴリーに現れなかったことは、制服のMCや生徒指導における着崩しの黙認のように、制服にファッション性を取り入れることに対する許容度や認知度が高まるにつれ、制服の着用において男女の違いや校則の厳格さなどの違いから生じる制約が小さくなったことが背景として考えられる。

5. 考察と課題

本稿におけるこれまでの分析結果で得られた知見は次の通りである。最初に生徒文化の態様と制服着用との関連性に関しては、第1に「学校での制服指定」の場合は、制服着用を必要とする生徒ほど学校へのコミットメントに積極的な傾向を示した一方、男子生徒の場合は学業達成、女子生徒の場合は学校充実感というように制服着用の必要性が影響を及ぼすベクトルに男女差が見られた。第2に「制服おしゃれの気遣い」は、女子のみ、おしゃれに否定的な生徒ほど学校へのコミットメントに肯定的な傾向が見られた。第3に制服で高校を選ぶ傾向は、高校進学後の生活意識にあまり影響を及ぼさないことである。今回の分析では、制服指定の必要性や制服の着こなしやおしゃれを重視する生徒は、学校に適応的な傾向を示した一方、制服が高校を選択する基準として影響を及ぼすかどうかについては、高校進学後の生活意識項目や成績・進路面の項目にあまり影響を及ぼさなかった結果からすれば、先行研究の知見（松田 2005b）と一致した。このことは、1990年代以降の個性化教育や「居心地の良い学校」の潮流の中で、学校における制服指定を弾力的に運用した影響が、結果的に学校生活の適応や制服の価値向上につながったと考えられる。

制服着用を規定する要因に関しては、第1は一部を除いて、高校進学後の所属である普通科・私立校ダミーは安定かつ一貫して正の影響を示した。第2に、親の学歴や職業などの階層要因は、制服着用に負の影響を及ぼす事例が多かった。第3に地方出身者を除いて、日常生活意識に関係する項目による影響が認められなかった。したがって、学校制服の着用を規定する要因としては、普通科や私立校の有無など学校の属性が積極要因として働く一方、親教育年数や親現職など、親の出身階層を反映した項目が消極要因となった。また、運動部、出席率などの在学実態を反映した項目は有意な影響が見られなかった。したがって生徒本人の制服着用には、学校校則での指定や制服のファッション性などの学校の特性による影響を強く受ける一方、制服の指定の有無や内容等に対する親の嗜好が一定の影響を及ぼす可能性はある。また、地方出身者のみに日常生活意識に関係する項目が一定の影響を示したことは、

制服着用を選択する際に、教師による服装指導や友人関係のような相談ネットワークが一定の影響を与える可能性を示したといえる。一方制服着用の消極性は、カテゴリーによっては出身階層項目に違いが見られなかったように、単純に親の出身階層による影響を認めるのではなく、出身地域の高校の特性（私立／公立校の在り方）や学力レベル、本人の制服着用に対する必要性が規定要因に結びつくと推測される。

制服着用を否定する層が自由服校に多かった要因には、制服より毎日好きな服が着られる自由服のファッション性を支持する意見が多いが、制服自体を否定的に捉えている訳でないという指摘（土屋・堀内 2005）があるように、生徒本人の学校で指定された制服に対する嗜好や、教師や学校側における制服の着こなしやファッションに対する理解状況が、制服の着用を肯定する分水嶺といえる。したがって、1990年代以降に「制服＝管理」図式が崩れ、生徒本人の着こなしやファッション性が許容された背景には、消費を通じた自己実現を求められる領域が拡大する一方、「向学校／反学校」に代表される生徒文化の分化が曖昧となる中で、着こなしの自由さやMCなどにより、学校へのコミットメントを促すツールとして制服の着用が重視されていると考えられる（大多和 2008; 伊藤 2002）。今後は、制服着用の実態を詳細に検討する中で、生徒の制服着用が流行によって左右される要因について、社会階層や進路選択など地位達成の側面から検証することが課題である。

[付記] 本稿の調査データの使用にあたっては、慶應義塾大学YES研究会の許可を得ている。なお本稿は、平成20年度文部科学省科学研究費補助金（課題番号：20330108）における研究成果の一部である。

注

- 1) 佐藤（1975）によれば、運動服に関しては1900年代ごろに洋服が普及し始めた一方、昭和初期までは女子学生自身が、他人に洋服姿を見られることに羞恥心を感じ、制服を洋服とすることに根強い抵抗感があったことを指摘している。一方、運動服の洋装化と「職業婦人」の関連性に関して斉藤（2003）は、高等女学校のカリキュラムに洋服が採用された理由として、①体育の充実（体格を良くし乳児死亡率を下げる）、②科学的発想の導入（生活や家事の科学化を後押しする）、③就職の奨励、の3点を挙げている。特に③は1920年代からごく当然な風潮として受け入れられるようになり、女性が職業に就くことが「国家の利益になる」として特に強調された。但し実生活上では「女性自身の人間形成に役に立つこと」「夫の理解を助け、母・妻としての役目を遂行する上でも役立つこと」の2点が重視された。
- 2) 生徒文化の分化が進んだ要因には、本来なら中学卒業で就職するか、あるいは高校進学をしない若者が、安定成長期を契機に始まった中卒就職市場の急激な縮小によって、就職のための「学歴資格」を取得するために「準義務化」した高校への進学を半ば強制される形で進学し、向学校の生徒（積極的進学）と反学校の生徒（不本意進学）が学級内で共存したことが挙げられる（酒井 1994）。実際には、学校で期待される行動様式に従わなければ、社会の承認を得られないほど支配的な学校文化が確立し、そして就職志望の場合にも、就職協定の慣行の成立によって学業を重視する傾向が強まったことが大きい。
- 3) 制服自由化運動は、主に子どもの自己決定権や親の養育権の侵害を根拠に、制服の着用規制に対抗するもので、子どもと親が中心に学校側に対抗するケースが多かった。制服自由化運動が始まった1980年代前後は、制服を廃止し私服通学が許可されたケースや、親やマスコミの批判に呼応して、各地の学校で制服の名称を「標準服」に改めて制服着用を義務としない動きが広まった（相川 1994; 山田 2003）。
- 4) DCブランドとは、Designer's Character Brandの略で、著名なデザイナーによるデザインを指す。MCを図る学校は1980年代後半に男女共学化や中高一貫校化の節目などに急速に増え、1992年にピークを迎えた。DCブランドは、実績や伝統のない新設校の受験者増加に一役買っただけでなく、ブレザーやスーツスタイルの制服を主流に押し上げることに貢献した（山口 2007; 三田村 2008）。

- 5) 上間 (2002) は、経済的に余裕のある高階層の生徒は、高校デビューの段階から、コギャル文化の卓越した担い手としてトップの地位にある一方、有利な後ろ盾を持たない生徒は、生徒集団でのポジション取りを続けながら、コギャル文化の獲得を行う傾向を指摘した。
- 6) 調査対象者を大学生とした理由は、同様の条件で行った先行研究も存在する (松田 2005a,b など) ことによる。学校制服の項目に関する調査設計を行う際には、先行研究での調査対象者で適用されている①調査対象者の選定過程に関して、学校制服に対する記憶が浅くなる大学3年以上が多数とならないように配慮する (本調査では対象者1100名中、大学1～2年生は891名と約8割以上を占める)、②当時の記憶と現在の意識が混在させることを想起させるような項目は極力避ける、という2つの方針を遵守した上で調査を実施した。したがって、分析の知見は青少年全般の制服着用の意識の分析にある程度反映され得ると考える。大学偏差値については、2009年度代々木ゼミナール公開模試の学部別入試難易度ランキング表 (<http://www.yozemi.ac.jp/rank/gakubu/index.html>) をもとに算出した。なお、分析等に用いる大学偏差値は、学部・学科別ではなく大学全体の総合偏差値を採用した。
- 7) 「第5回教育に関する意識調査」は、高校時代の生活意識と大学進学後の現在の生活の分析を主とし、本人の属性に関わる変数 (性別、年齢、親学歴、親職業、家庭の生活水準) を加えた。調査内容の概要は、所属高校 (国公立、普通校/職業校、進学校/進路多様校などの学校タイプや部活動、授業出席率、高校時代の成績)、生活意識 (学校に対する適応の程度、学校制服、校則)、大学進学後の現在の生活 (大学進学 of 動機、授業出席率、アルバイトの有無、部活・サークルの加入状況)、現在の生活意識 (家庭・大学生生活、友人関係、規範意識)、将来展望 (職業観、具体的な将来の職業) により構成されている。
- 8) 「現職」は専門職・ホワイトカラー上=5、ホワイトカラー=4、ブルーカラー・自営=3、非正規職=2、無職・その他=1、「家庭の生活水準」は本人の家庭について、余裕がある=7～余裕がない=1の自己申告による7段階評価で投入した。
- 9) 「成績」は、上=5～下=1の5段階評価、「高校出席率」は80%以上=1～19%以下=5の5段階評価で、いずれも高校在学時の平均成績・出席率を自己申告により記入させた。
- 10) 「学校生活」(11項目)「家庭生活」(4項目)「規範意識」(10項目)「脱学校志向」(3項目)については、関連する項目を元に主成分分析にかけた上で、各項目で相関が見られる項目を抽出し尺度構成を行った。「学校生活」尺度とは、表2で用いた「授業に充実感があつた」など、学校での生活や校則への適応、日常的な学習習慣に関係する項目、「家庭生活」尺度とは、「家族との仲がよい」など、家族とのコミュニケーションの良好さを尋ねた項目、「規範意識」尺度とは、カンニングやごみのポイ捨てなど、社会的なルールや規範を尋ねた項目、「脱学校志向」は、表2で用いた「授業をさぼったり、学校を休みたくなることがあつた」など、学校外の生活重視や学校への逸脱傾向を示す項目である。各尺度の信頼性を示すクロンバックの α は、「規範意識」が.728、「家庭生活」が.633、「友人関係積極志向」は.633、「学校生活」が.635、「脱学校志向」は.629であり、他の社会調査におけるクロンバックの α における尺度の妥当性としてはやや弱いがある程度尺度の信頼性が認められる。
- 11) 8) の大学ランキングに基づき、偏差値50以下の大学に通う学生を低位群、偏差値51-59までの大学に通う学生を中位群、偏差値60以上の大学に通う学生を高位群として便宜的に区分した。

参考文献

- 阿部晃士, 2008, 「社会意識はどのように変わったのか—満足感・不公平感の動態と学歴意識の変容」片瀬一男・海野道郎編『「失われた時代」の高校生の意識』有斐閣, pp. 167-190.
- 相川良子, 1994, 「今なぜ制服か—「自由」と「責任」のちぐはぐな関係の中で市民権もつ「制服」『女子教育もんだい』59: 12-17.
- 荒牧草平, 2001, 「学校生活と進路選択—高校生活の変化と大学・短大進学—」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房, pp. 63-80.
- 江原由美子, 1985, 「服装の社会学」江原由美子・山岸健編『現象学的社会学』三和書房, pp. 297-312.
- 羽賀敏雄・渋谷知佳子, 2006, 「高校生の制服着用の意識とコミュニケーション行動」『弘前大学教育学部紀要』95: 93-101.
- 伊藤茂樹, 2002, 「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』70: 89-103.
- 荻谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論社.

- 片瀬一男, 2003, 『ライフ・イベントの社会学』世界思想社.
- 松田いりあ, 2005a, 「学校制服の「生産」と「消費」——ファッション化の経緯および着用の現状」『ソシオロジ』50(1): 35-50.
- , 2005b, 「消費社会における学校制服——1970年代以降の展開」大野道邦・油井清光・竹中克久編『身体社会学——フロンティアと応用』世界思想社, pp. 333-351.
- 耳塚寛明, 1980, 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』35: 111-122.
- 三田村藤子, 2008, 『コスプレ: なぜ, 日本人は制服が好きなのか』祥伝社.
- 宮崎あゆみ, 1993, 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス—女子高におけるエスノグラフィーをもとに—」『教育社会学研究』52: 157-177.
- 仲川秀樹, 1990, 「女子中高生とジェンダー—制服に見る“女らしさ”の社会学—」『衣生活研究』17(5): 26-31.
- , 2002, 『サブカルチャー社会学』学陽書房.
- 中村泰子, 2004, 『「ウチら」と「オソロ」の世代—東京・女子高生の素顔と行動』講談社.
- 難波知子, 2007, 「近代日本における学校制服文化の形成に関する考察——学校制服論試論」『デザイン理論』50: 65-78.
- 大多和直樹, 2000, 「生徒文化—学校適応」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, 185-213.
- , 2008, 「若者文化と学校空間—学校の遮蔽性と生徒集団の統合性はどう変容したか」広田照幸編『若者文化をどう見るか』アドバンテージサーバー, pp. 94-116.
- 斉藤美奈子, 2003, 『モダンガール論—女の子には出世の道が二つある』文藝春秋.
- 酒井朗, 1994, 「1970～80年代高校生文化の歴史的位相」『アカデミア (南山大学文学部)』59: 225-254.
- 酒井順子, 2002, 『制服概論』新潮社.
- 佐藤秀夫, 1975, 「学校における制服の成立史—教育慣行の歴史的研究として」『日本の教育史学』19: 4-24.
- 佐藤 (佐久間) りか, 2002, 「「ギャル系」が意味するもの: 〈女子高生〉をめぐるメディア環境と思春期女子のセルフイメージについて」『国立女性教育会館紀要』6: 45-57.
- 土屋みさと・堀内かおる, 2005, 「制服および着装行動に対する高校生の意識」『日本家庭科教育学会誌』48(2): 141-149.
- 上間陽子, 2002, 「現代女子高校生のアイデンティティ形成」『教育学研究』69(3): 367-378.
- 山田昌弘, 2003, 「「なんちゃって制服」増殖」『子どものしあわせ』630: 58-61.
- 山口晶子, 2007, 「若者文化としての学校制服——女子高校生の制服おしゃれに着目して」『子ども社会研究』13: 62-71.